

江戸時代 阿波の民衆が見た “異国”

徳野 隆（徳島県立文書館）

はじめに

江戸時代は本当に “鎖国” だったのか？

→ 交易する港と相手を限定する管理貿易＝当時の東アジアでは一般的

長崎の他に、薩摩藩が管理する琉球経由の中国との交易、対馬藩が管理する朝鮮との交易、松前藩が管理する蝦夷地経由の沿海州等との交易＝「四つの口」の存在

※江戸時代後半には「鎖国は祖法」との認識が一般化していた

※欧米人も「日本は閉ざされた国」というイメージを持つようになる

c f. メルヴィル『白鯨（モビィ・ディック）』

江戸時代の “異国船” の多くは中国船（漂着船及び漂着船を装った密貿易船）

→ 幕府は密貿易船は厳格に取り締まり

“本当の” 漂着船は応急手当を施した上で長崎に回航しそこから帰国させる

※一般民衆との接触は厳しく制限

※中国船の回航に際して沿岸の大名はサポートを幕府から命ぜられる

朝鮮通信使やオランダ商館長の江戸参府やなど “異国” の人に触れる機会はある

※それでも江戸時代の民衆にとって “異国” は遠い存在

→ 阿波の民衆はどのように “異国” と遭遇し、そこから何を受け取ったのか？

1. “異国” を垣間見た人々

(1) 近世阿波における主な漂流者

初太郎（撫養岡崎村）

天保12年（1841）漂流中にスペイン船に救助される

メキシコ領カリフォルニア半島・ハワイ・マカオ・ニンポー等を経由して帰国

→ アヘン戦争直後の中国を目の当たりにする

藩主の命令で体験談が『亜墨新話』としてまとめられる

苗字（長尾市太郎）・帯刀を許される

幸宝丸乗組員（撫養）

弘化元年（1844）漂流 米国捕鯨船に救助されて帰国

政吉（淡路国津名郡）

安政3年（1856）漂流 米国捕鯨船に救助されハワイを経由して帰国

苗字（天毛）・帯刀を許されて藩船乗船御用や徳島藩初の通辞となる

※高田屋嘉兵衛（淡路国津名郡）

海商として蝦夷地で活躍

文化9年（1812）にロシアに拿捕・翌年解放 日露関係改善のきっかけとなる

（2）長崎への留学生達

美馬順三・高良斎＝シーボルトの高弟

井上春洋＝徳島で最初に種痘を行う

（3）世界地誌・世界地図の存在

江戸時代後期に世界地誌・世界地図のレベルは急速に向上

世界地誌の例

『和漢三才図会』

中国の『三才図会』に刺激を受けた大坂の医師寺島良安が30年以上の歳月をかけて
正徳2年（1712）に完成させた絵入りの百科事典

第13巻「異国人物」には震旦（中国）・朝鮮・琉球・蝦夷・韃靼（蒙古）などが

第14巻「外夷人物」には呂宋（フィリピン）・天竺（インド）などととも三首・
三身・長人・小人・狗頭などが登場→当時の「異国」、「異域」のイメージがわかる

『四十二国人物図説（万国人物図）』

蘭学の先駆者の一人である西川如見が享保5年（1720）に刊行

42国の人物の絵に簡単な説明が付いたもので後の人物図譜の基本となる

図はヨーロッパ人が作ったものを長崎の画家が写したとされる

長人と小人以外の「怪異」な民族は姿を消す

『瀛環志略（えいかんしりゃく）』

清朝末期の政治家・思想家の徐繼畬（じょけいよ）が1849年に編纂

世界の各地域に関する詳細で正確な記述

井上春洋らが訓点をつけたものを文久元年（1861）に徳島藩が刊行

世界地図の例

『南瞻部洲万国掌葉之図』

作者は浪華子で宝永7年（1710）に刊行

仏教的世界観をベースにヨーロッパからの地理上の新知見を盛り込んだもの

『地球万国山海輿地全図説』

長久保赤水（常陸出身の地理学者）が作成し天明5年（1785）に刊行

ベースになったのはマテオ・リッチ（明朝に重用された宣教師）が中国で作った『坤
輿万国全図』（1602年刊行）

各大陸の形はかなり正確であるが

- ・北極圏に夜人国や小人国、南米に長人国が描かれている
- ・オーストラリアと南極が一つの大陸として描かれ、墨瓦臘泥加（メガラニカ）＝長らく存在を信じられていた南方大陸と書かれている

→刊行当時（クックらの調査以前）の地理的知識がわかる

『万国航海図』

英国で1845年に作られたものを武田簡吾（沼津藩士）が翻訳して安政5年（1858）に刊行

地図は正確で、コロンブスの航路なども記載

付録として「万国旗印全図」やロンドンから主要都市への距離なども記載

※江戸時代後半には、知識人の一部はかなり正確な外国事情を把握

→これらの知識が民衆にどの程度広まっていたかがこれからの検討課題

2. ベニョフスキー漂着事件（明和8年 1771年）

明和8年、阿波国海部郡日和佐浦（現・海陽町）に異国船漂着

→徳島藩にとってはじめての本格的なヨーロッパ船漂着事件

江戸時代後期の海防論に大きな影響を与える

（1）ベニョフスキーとは

1746年：ハンガリーで退役陸軍大佐の子として生まれる

※本人は「1741年に伯爵家に生まれる」「七年戦争にオーストリア軍の将軍として参加」等の虚偽をのべている。

1768年：ポーランドの内戦に際して反国王派（バール連盟）に参加

1769年：国王を支持するロシア軍の捕虜となりカムチャッカの収容所送りとなる

1771年：仲間とともに船を奪って逃走

千島・土佐（崎浜）・阿波（日和佐）・土佐・奄美大島・台湾などを經由してマカオに着き、最終的にヨーロッパへの帰還を果たす

1774年：フランスの後援でマダガスカルに植民地建設などを計画し失敗

1785年：米国でスポンサーを見つけマダガスカル遠征に再挑戦

1786年：逮捕に来たフランス軍との戦闘によりマダガスカルで死亡

1790年：彼の『回想と旅行記』英語版刊行＝ベストセラーとなる

1791年：フランスで縮刷版刊行 以後各国で刊行が続く

※このころから彼を主人公とする戯曲やオペラなどが次々と作られる

※『回想と旅行記』は虚偽と誇張に充ち満ちている

→同行者の記録があり検証が可能

以上、『ベニョフスキー航海記』（東洋文庫）等より

（2）阿波の古文書に見るベニョフスキー

（a）徳島藩の対応

6月10日：日和佐浦恵比須浜に異国船漂着の一報が徳島城下に届く

同11日：鉄砲組頭2名（鉄砲組2組・40名）を日和佐浦に派遣

郡奉行・代官も現地に派遣

海部郡在住の海部鉄砲者10名 多数の人夫も動員

地元の漁船も番船として動員

同 1 2 日：徳島藩側の制止をふりきってベニョフスキーは強引に出港

→番船（漁船）群の阻止行動を石火矢で威嚇しながら沖合に消える

同 2 1 日：鉄砲組頭兩名が徳島に帰着

※海部郡四方原村（現・海陽町）庄屋野村家の記録（『海南町史』所収）と「阿淡年表秘録」（徳島藩の正史）より

※ベニョフスキーは各地からオランダ商館宛の書簡を出す、その中に極東におけるロシアの軍事力と南進の意図を誇大に強調したものあり

→これが漏れ伝わって林子平・工藤平助らの海防論に影響を与える

※オランダ語読みのファン・ベンゴロから日本ではハンベンゴロと日本では呼ばれる

3. 異国船対応の高札（寛政 5 年 1793 年）

～板野郡栗田村庄屋藤倉家文書より～

※寛政 5 年 8 月、郡奉行が異国船への対応に関する高札を番所に配布

→異国船発見時の通報義務と通報者への報奨、異国船との接触禁止、番所における武具の整備などを指示

※背景：寛政 3 年に幕府が異国船の対応法を通達

→徳島藩も対応をはじめ、後に砲台や狼煙の整備に着手

4. 牟岐浦異国船漂着一件（文政 1 2 年 1829 年）

※文政 1 2 年 1 2 月、土佐に漂着したイギリス船が海部郡牟岐浦等にも漂流

※徳島藩は厳戒態勢を取り、砲撃等を交えた交渉で退去させる

→徳島藩政史上最も有名な異国船漂着事件

(a) 漂着事件の顛末

文政 1 2 年 1 2 月

1 2 日：土佐国沖合に異国船漂着 その後姿を消す

→徳島藩は情報収集のために灘目附や地元の庄屋を土佐に派遣
警戒態勢に入るが異国船が姿を消したために解除

2 0 日：日和佐沖で異国船発見・牟岐沖に投錨

→徳島藩は非常警戒態勢を取ると共に速やかな出帆を強要

2 3 日：砲撃を受けて異国船は退去

(b) 徳島藩の対応

異国船発見と同時に徳島に速報 城下から郡代・目付等が到着

郡代手代や海部鉄砲者・郷鉄砲の他に事前に指定しておいた猟師も動員して各浦の防備を固める 鉦・太鼓・法螺貝・鉄砲で威嚇

「兼て浦々役人共へ示し置ニ付、樹木繁茂ノ処々に幕ヲ張幟数多立」

・幕は浄瑠璃興行などで使う寺号入りのもの

・幟は端午の節句や氏神祭礼用で八幡宮や朱の鍾馗あり

→「蛮人の見はともに兵器とおもひけんといとおかし」

※当時、幕府の異国船打払令が出していたが、徳島藩が異国船漂着に対する周到な防衛計画を立てていたことがわかる

異国船に小舟で近づき交渉と状況偵察 武装の有無を確認 “賊船”の可能性を疑う
→異国船は薪水や食料を乞う
薪水の礼に婦人を描いたガラス絵等を出す（これは返却）
日本人と煙草の交換 日本人に酒を勧める 等々
「壺人図せることき釣瓶をもち出ペエスペエス（ピース？）と轉り胸をさする」
→“賊船”ではと疑っていた郡代は交渉に派遣した者が同情心を抱いて帰ってくることに對して「バテレンの妖術か」と警戒している

愛玩用の黒縁の犬が乗船（食料には見えず 専ら愛し居る体なり）
船倉には食料用のブタを飼育か
土佐で得た情報
「人物之美麗にして阿蘭陀絵ニ能似寄、髪はザン切、長も六尺余ニ相見候」
→錦絵なども民衆の“異国”観に影響か

日和佐陣屋備え付けの「蛮国船印図」でイギリス船であることを確認
「是を見るに諳厄利亜治所三国一致之幟と有 きゝなれざる国なれど赤髪なればさためて阿蘭陀近国ならんといひ合居たり」

大砲の弾を見せて出帆を強要→異国船は修理のための猶予を乞う
→海陸から砲撃を開始（最初は威嚇 最後は船腹を狙う）
「此玉久しく鑄おけるものにて虫の喰たる如く数多穴明たるゆゑに鳴音ことに高し」
風の関係も有り異国船は当初南方へ進路を取り、後に吹き始めた陸からの風に乗って沖合に出る

※漁師に変装して異国船の偵察に赴いた郡代手代浜口卷太が書き残した絵入りの『異国船舶来話并図』等より その他多くの記録有り

(c)その後

異国船の行方は知れず
浜口は様々な憶測を巡らし、林子平などを引きながら海防の重要性を記す
ニコラス・ラッセル氏の最近の研究が注目されている
→この船は当時英国植民地であったオーストラリアのタスマニアで囚人が強奪し、各地で海賊行為を働いていた英国船キプロス号ではないか。
＝日本とオーストラリア（徳島とタスマニア）のファーストコンタクト？
異国船退去後に徳島藩は日和佐で大砲のデモンストレーション試射
→その内の一門が破裂
異国船対応に多額の経費→後々まで大きな問題となる

5. 阿波の民衆の耳に届いたペリーとプチャーチンの噂（嘉永6年・7年）

～元木家文書「かどや日記」～

※ペリー来航については阿波国内で瓦版が出るなど、民衆の関心も極めて高かった

※名西郡高原村（現石井町）在住の元木家が書き留めた「かどや日記」から、当時の阿波国民衆の耳に入った黒船の「噂話」を紹介

(1) 嘉永6年（1853）：ペリーの浦賀来航について

5・6月境に浦賀にアメリカ船4艘来航 6月上旬に一艘が神奈川沖に侵入

「江戸始近国大騒動」 徳島からも鉄砲組を派遣

8月までに返答をしたのでアメリカ船は全て帰路につく

「アメリカハ極大々之大国故、いか成難事申越候哉其義ハ相分り申義ニ而も無之候得ども、何れ大變之義ト公儀始諸大名方下々之者とも大心配之義ニ而候」

「中ニ而大船幅三十間余、長七十四五間之一艘かな川沖へ乗込候ニ付」

「どち風、でも一日に数百里も走り、無風でも余程走る

仕掛は龍車の如く、時計仕掛けで車を廻し羽で水を掻いて進む

→実際のペリー艦隊（蒸気外輪船と帆船が各2隻）の動き

6月3日に浦賀沖に出現 同4日に幕府役人が接触

同6日に測量のための短艇と護衛の黒船1隻が江戸湾に侵入

同9日にペリーは久里浜に上陸 大統領の国書を手渡し翌年の再来港を宣言

同12日に江戸湾を離れる

徳島藩は幕府から佃島・鉄砲洲（東京都中央区）の、翌年のペリー再来港の時には羽田・大森（東京都大田区）の警備を命ぜられる

※関連するその他の「噂話」

南方に異国船の伝馬船（カッターか）が漂着 木類・作り方共に御国船大工では理解不能で、前藩主の蜂須賀斉昌に見せた後、津田番所船小屋に保管

8月頃、長崎にロシア船4艘来航・交易を求めるも拒絶されて帰路につく

→これはプチャーチン率いるロシア艦隊

(2) 嘉永7年（安政元年）：プチャーチンの大坂来航

9月上旬、大坂安治川海辺に異国船1艘来航

「近国騒動仕り、海辺之御大名方夫々御手当有之候」

大坂に通辞がないので何をしにきたのかよくわからない

伝馬船を2艘下ろして安治川へ侵入を計るも船番所が小舟を出して阻止

人々が小舟で乗り付て勝手に小物を交易したので禁止の上関係者は拘留

長さ30間程 左右の垣立の上に2～3尺程の練堀

両舷に11程の「矢狭間」、それぞれ「大筒」が仕掛けてある

フロシアという仮名書きの幟を3本立てている（これは疑問）が、どこの国か不明

10月上旬に出帆

→函館から回航し後に下田へ向かうプチャーチンのディアナ号

※関連するその他の“噂話”

同時期に若狭国へ2艘の異国船、長崎に3艘のイギリス船来航 若狭へは藩士を派遣
ロシア船が淡路沖を通過時に偵察のため徳島藩士を鯨船で派遣するも由良港外で難破し
乗員の一部が水死

→この鯨船には長尾市太郎（初太郎）も同乗していた

6. 英国公使パークスの来徳（慶応3年 1867）

8月に英国公使ハリー・パークスや通訳官アーネスト・サトウらが徳島訪問
藩主蜂須賀斉裕・世子茂韶（翌年に最後の藩主となる）に面会
徳島藩兵の訓練も見学

7. 剣術・砲術経験者の調査（文久3年 1863年か）

※異国船御手当のために村内の武芸稽古者を調査

→徳島藩の武芸勸諭政策の一環＝“農兵”編成と関連か

おわりにかえて

主な参考文献

佐光昭二著『阿波洋学史の研究』（2007年 徳島県教育印刷）

水口志計夫・沼田次郎訳『東洋文庫160 ベニョフスキー航海記』

（1977年 平凡社）

ニコラス・ラッセル「サムライと海賊」（HP上で公開）

徳野隆著「江戸時代 阿波の民衆が見た“異国”」（2015年

四国地域史研究連絡協議会編『岩田書院ブックレット 「船」から見た四国』所収）
徳島の古文書を読む会1班編『史料集十 文政十二年十二月 異国船牟岐浦漂着一巻』

（2012年）

〈関係略年表〉

明和8年（1771）

ベニョフスキー来航（6月）

寛政3年（1791）

異国船への対応を幕府が諸大名に通達（9月）

寛政4年（1792）

ラクスマン来航（9月） 海防強化を幕府が諸大名に命じる（12月）

寛政5年（1793）

異国船対応の高札（8月）

徳島藩は海部郡における砲台建設などの海岸防備に着手する

文化元年（184）

レザノフ来航（9月）

文化3年（1806）年

文化の薪水給与令（1月）

文化4年（1807）

佐渡美濃（徳島藩家老）言上書に土佐・紀州沖のロシア船に関する記載あり

文化5年（1808）

佐藤信淵が徳島藩に招かれる（3月）

→集堂勇左衛門の失脚に伴い翌年に阿波を離れる（疑問視する説あり）

フェートン号事件（8月）

文化9年（1812）

高田屋嘉兵衛がロシアに捕らえられる（8月）

文政6年（1823）

土佐に漂着した江南船が長崎回漕中に沖合を通過

文政8年（1825）

異国船打払令（2月）

文政12年（1829）

牟岐浦等にイギリス船漂着（12月）

天保8年（1837）

モリソン号事件

天保13年（1842）

天保の薪水給与

嘉永6年（1853）

ペリーの浦賀来航（6月）→徳島藩：佃島・鉄砲洲の警備に出陣

プチャーチンの長崎来航（7月）

嘉永7年（安政元年 1854）

ペリーの再来航（1月）→徳島藩：大森・羽田の警備に出陣

プチャーチン再来航（3月）→長崎・函館・大坂・下田を巡る

淡路沖を通過するときに警戒態勢をとる

由良・岩屋の砲台建設に着手

安政5年（1858）

安政条約調印

文久元年（1861）

津田川口の砲台建設に着手

文久3年（1863）

多田宗太郎が小松島弁天山砲台を藩に献上

慶応3年（1867）

英国公使パークス来徳（8月）

※太字は徳島藩関係の事項